カープファンの内集団ひいき

社会的アイデンティティ理論と閉ざされた一般互酬仮説の妥当性の検討

○中川裕美¹・横田晋大²・中西大輔²

(¹広島修道大学大学院人文科学研究科・²広島修道大学健康科学部)

キーワード: 内集団ひいき, 社会的アイデンティティ理論, 閉ざされた一般互酬仮説

Ingroup favoritism in baseball fans of Carp.

Yumi NAKAGAWA¹, Kunihiro YOKOTA² and Daisuke NAKANISHI²

(¹Graduate School of Humanities and Human Sciences, Hiroshima Shudo Univ., ²The Faculty of Health Sciences, Hiroshima Shudo Univ.)

Key Words: Ingroup favoritism, Social Identity Theory, Bounded Generalized Reciprocity Hypothesis

目 的

差別・偏見につながる内集団ひいきの説明原理として社会的アイデンティティ理論 (以下, SIT; Tajfel & Turner, 1979) と閉ざされた一般互酬仮説 (以下, BGR; Yamagishi & Kiyonari, 2000) の妥当性が議論されてきた。中川・横田・中西 (2015, 投稿中) は野球ファンを対象とした場面想定法実験で SIT と BGR の妥当性を検討した。本研究では, 中川他 (投稿中) の結果が, 実験室実験でも再現されるかを検討する。

中川他 (2015, 投稿中) から, 協力のコストが明示されていない場合には SIT と BGR の両理論が, 明示された場合には BGR のみが支持されることが明らかにになった。すなわち, SIT と BGR の説明力の境界要因の一つが, コストの大小であることが示唆された。しかし, 場面想定法のため, 結果の妥当性には限界がある。そこで, 本研究では金銭報酬を用いた 1 回限りの囚人のジレンマ (以下, PD) ゲームを用いて, 両理論の妥当性を検討する。仮説 協力行動にコストがかかる場合には BGR が支持される。

方 法

日時・参加者 実験は 2017 年 4 月に行い, 参加者 109 名中野球ファン 38 名 (男 19 名, 女 19 名) を分析対象とした (カープファン 24 名)。平均年齢は 18.62 ($SD = 0.79$) 歳であった。

手続き 実験は約 60 分を要し, 約 8 名前後が一度に参加した。参加者は受付で ID 番号を与えられた後, 個室のブースに案内された (匿名性の保持)。PD 実験を開始する前に実験の第一部として, 事前質問紙への回答を求めた。質問紙では, 参加者の応援するチームを選択させた後 (応援するチームがない人は好きなチームを選択), 同一化尺度 (cf., 中川他, 2015), 互惠性の期待 (神・篠塚, 1996) を測定した。

事前質問紙への回答が終了した後に, 実験の第二部として PD 実験を行った。参加者は実験のやり取りに関する理解度テストに正解した後に, 1 回目の取引を開始した (不明)。実験者により封筒が配られ, 同封の集団所属性の用紙を見て相手との取引状況を確認した上で, 毎回の元手 200 円の内, 相手へ提供する金額を記入するように求められた (10 円単位)。実験者は「提供した金額は元手から引かれ 2 倍にされて相手に渡り (相手も同様の決定を行う) ゲームの結果で報酬が決まる」と教示した。参加者は同様の取引を計 3 回 (相手の情報がない不明条件/お互いに同じチームを応援していると教示される相互条件/自分だけが相手と同じチームを応援していると知っている自知条件; 不明条件を 1 回目に行い, 相互と自知はカウンターバランス) 行った後, 事後質問紙と報酬同意書を記入し退出した。

予測 SIT 支持の場合, 相手が野球ファンと分かる相互・自知で提供金額が高くなり, BGR 支持の場合, 互いに野球ファンと分かる相互のみで提供金額が高くなると予測される。

結 果

まず, 野球ファンとファン以外の人で同一化に違いがある

かを確認したところ, 野球ファン ($M = 45.45, SD = 10.31$) はファン以外の人 ($M = 31.11, SD = 11.06$) よりも強く集団に同一化していた ($t(107) = 6.60, p < .01, d = 1.32$)。

互惠性の期待の操作が成功したかを確認するため, 相手に提供されると予想した金額に従属変数, 所属性の知識を独立変数にした分散分析を行った結果, 知識の主効果が見られた ($F(2, 74) = 25.13, p < .01, \eta_p^2 = .40$)。Holm 法の多重比較を行うと相互 ($M = 116.84, SD = 60.85$) で最も予想金額が高く, 続いて自知 ($M = 74.74, SD = 51.71$), 不明 ($M = 61.58, SD = 56.69$) の順であり ($p < .01$), 互惠性の期待の操作は成功していた。

次に, 仮説の検討のため, 提供金額に従属変数, 所属性の知識を独立変数にした分散分析を行った結果, 知識の主効果が見られた ($F(2, 74) = 12.75, p < .01, \eta_p^2 = .26$)。Holm 法の多重比較を行うと相互 ($M = 118.68, SD = 70.37$) で最も提供金額が高く, 続いて自知 ($M = 105.26, SD = 68.17$), 不明 ($M = 80.26, SD = 60.87$) の順であった ($p < .01$)。以上の結果は BGR を支持するものだった。自知での提供金額は同一化と相関が見られず ($r = .20, p = .22$), SIT は支持されなかった。

Figure 1. 野球ファンの提供金額と予想金額 (エラーバーは標準誤差, 英添え字が異なれば有意差があることを示す)。

考 察

本研究は, 中川他 (投稿中) による場面想定法の実験結果が実験室実験でも再現されるかを検討した。実験の結果, 中川他 (投稿中) の結果が再現された。互いに野球ファンだと分かる時に最も多くの額が提供され, BGR のみが支持された。非協力の誘因が強い PD ゲームでも同様の結果が得られたことから, SIT と BGR の境界要因の一つは, コストの大小であると考えられる。

引用文献

- 神 信人・篠塚 寛美 (1996). 相互依存認知と協力傾向 日本社会心理学会第 37 回大会発表論文集, 154-155.
- 中川 裕美・横田 晋大・中西 大輔 (2015). 実在集団を用いた社会的アイデンティティ理論および閉ざされた一般互酬仮説の妥当性の検討——広島東洋カープファンを対象とした場面想定法実験—— 社会心理学研究, 30, 153-163.
- 中川 裕美・横田 晋大・中西 大輔 (投稿中). 野球ファンの内集団ひいきに関する場面想定法実験 心理学研究.
- Tajfel, H., & Turner, J.C. (1979). An integrative theory of intergroup conflict. In W.G. Austin & S. Worchel (Eds.), *The social psychology of intergroup relations* (pp. 33-47). Monterey, CA: Brooks/Cole.
- Yamagishi, T., & Kiyonari, T. (2000). The group as the container of generalized reciprocity. *Social Psychology Quarterly*, 63, 116-132.